『空想から科学へ』読書会レジュメ（第 3 章後半）

2009.12.11
文責／須藤

■第 3 章後半の概要

（引用文は、国民文庫版（大月書店）によります。また、〔　〕内の補足は、引用者によるものです。）

●社会的生産と資本主義的取得との矛盾の増大

○工場内の生産の社会的発達と、社会内の生産の無政府状態は、両立不可能なまでに達する。

→資本主義的生産様式は、大量の生産手段をもはや全部は資本には転化できない。
（生産手段は前もって、人間の労働力を搾取する手段に転化していない限り、活動を開始できない）

→資本主義的生産様式は、生産力をもはや管理する能力が自らにないことを認めざるを得ない。

→増大した生産力自身が、社会的生産力としての性格を承認されることを迫るようになる。

→「大規模な生産施設や交通施設の株式会社やトラストや国有化への転化」に向かう。

→ブルジョワジー（資本家）はもはや、不要になる。

●資本主義国家の性格とその終焉

○「株式会社やトラストへの転化も国有への転化も、まだ生産力の資本としての性格を廃棄するものではない」

→近代国家は、資本主義的生産様式の外的諸条件を守るために、ブルジョワ社会が作った組織

→「近代国家は、その形態がどうであろうと、本質的に資本主義的な機関であり、資本家の国家であり、観念的な総資本家である。」

→「生産力の国有は、衝突の解決ではないが、しかしそれはそれ自身のなかに解決の形式上の手段、その手がかりを宿している。」

→成長した生産力を、社会が公然と掌握することによってのみ、矛盾は解決される。

→強大な生産力の性格を理解することにより、社会的な生産の無政府状態（資本主義）は、社会全体と各個人の欲望に応じた社会的・計画的な生産にかえることができる。

●生産手段の社会化にとっての、プロレタリアートの役割

○「どの国民もトラストによって支配される生産、ひとにぎりの利札切りたちによる社会全体のあからさまな搾取に甘んじてはいないだろう。」

→「資本主義的生産様式は、ますます人口の大多数をプロレタリアに転化させる」。

→「プロレタリアートは国家権力を掌握して、生産手段をまず国有に転化させる。」

→抑圧しておかなければならない社会階級の消滅により、階級支配、生産の無政府状態による競争が除去されるので、抑圧権力である国家も不要になる。

→「国家は、『廃止される』のではない。それは死滅するのである。」

●歴史の発展段階と社会主義

○社会による生産手段の掌握は、「その実行のための現実的諸条件が存在したとき、はじめて可能となり、はじめて歴史的必然となることができた。」

→それは、階級を廃止しようとする単なる意志ではなく、経済的諸条件による。

（⇔空想的社会主義）

→社会的諸階級の廃止は、生産の高度な発展を前提とする（前述の、生産力の増大に関する記述を参照）。

※生産力の発展が歴史の前身の基礎であるという、唯物史観に基づく見方である。

●生産手段の社会的所有によってもたらされる社会とは？

○恐慌のさいに頂点に達するような、生産力と生産物との浪費や破壊を除去する。

○支配階級やその政治的代表者たち（政治家）の奢侈的浪費を除去する。

○大量の生産手段と生産物を社会全体のために自由に利用できるようにする。

○社会全員の肉体的・精神的素養の完全で自由な育成や活動を保証するような生存の可能性をもたらす。

→「人間は、自分自身の社会化の主人になる。また、そうなることによって、はじめて自然の意識的な真実の主人になる。」

→「これは、必然の国から自由の国への人類の飛躍である。」

●歴史的発展過程のまとめ（内容は略）

1. 中世社会
2. 資本主義的革命
3. プロレタリア革命

●結語

「この世界解放の事業をなしとげることは、近代プロレタリアートの歴史的使命である。この事業の歴史的諸条件と、それとともにその本性そのものを究明し、こうして、行動の使命をおびた今日の被抑圧階級に、それ自身の行動の諸条件と本性を自覚させることは、プロレタリア運動の理論的表現である科学的社会主義の任務である。」

以　上